

チベット語古典文法書『シトゥ大註』の研究

(要約)

班青東周

論文の題目

チベット語古典文法書『シトゥ大註』の研究

論文の目的と方法

シトゥ・パンチェンは『シトゥ大註』において、サンスクリット文法理論に依拠し、『三十頌』に対する先行の註釈書や『言葉の門』などを批判的に考察しながら、チベット語の音声理論や格助詞の用法などを正確に説明しようとしている。シトゥが試みたサンスクリット文法理論のチベット語への適用には多くの問題があり、その妥当性についてシトゥ以降のチベット学者達の間で議論が行なわれた。サンスクリット文法理論からチベット語文法理論をどの程度まで導くことができるか、また、サンスクリット文法理論では説明がつかないチベット語独自の特性は何であるかというのが、シトゥ以降に展開したチベット語文法学に潜在する問題である。本研究は、チベット語古典文法書『三十頌』を『シトゥ大註』に依拠して読解し、『三十頌』本文の内容を祖述した後、『シトゥ大註』におけるyi geの概念、音声論、助詞の理論に見られるシトゥのサンスクリット文法理解と、彼自身の文法理論体系を考察することにより、上記の問題に対するシトゥの立場を解明することを目的とする。

以下に、各章の内容と研究方法を詳述する。

[1] チベット語のyi geの概念と、チベット語音声論に関するシトゥの解釈を考察する。yi geの概念については、『三十頌』の説とそれに対する『シトゥ大註』の解釈を考察し、さらにシトゥ以降のチベット人学者達の解釈についても調査する。チベット語音声論に関しては、チャンドラゴーミンの『ヴァルナ・スートラ』や、ジェツン・ソナム・ツェモの理論に立脚するシトゥの見解を検討する。

[2] チベット語の助詞の理論に関するシトゥの見解を考察する。特に『シトゥ大註』に見られるシトゥのサンスクリット文法理解に注目し、サンスクリット文法理論のチベット語への適用可能性について検討する。さらに、シトゥに先行するナムリン・パンチェンとタティ・リンチェン・トンドゥプの解釈を取り上げ、シトゥによる批判について検討を加える。

[3] チベット語のla don助詞に関するシトゥの解釈を考察する。『言葉の門』やシトゥ以前のチベット人文法学者が著した『三十頌』註釈との比較考証を行ない、さらに、シトゥ以降のチベット学者達の議論についても検討する。

以上の考察に基づき、シトゥのサンスクリット文法理解と、サンスクリット文法理論のチベット語への適用可能性について検討し、サンスクリットとは異なるチベット語の特色を探る。

論文の構成

本論文は序論、本論、付論より構成される。本論は全て3章及び結論から、付論は翻訳研究からなる。

序論

序論では、チベット語文法学略史、研究の目的と方法の提示を行った。

本論

本論では、以下の事柄を提示した。

第1章では、āliとkāliから構成されるチベット語のyi geの概念、及び『ヴァルナ・スートラ』やジェツン・ソナム・ツェモの理論に基づくシトゥのチベット語音声論について考察した。

第1章の1.1「チベット語文法学におけるyi geの概念」で明らかにしたように、トンミは『三十頌』において yi geが四つのāliと三十のkāliから構成されると述べ、明らかにyi geとして四つの母音記号とkaからaまでの三十の文字を想定している。これに対し、サキャ・パンディタは、文字ではなく音声をyi geの本質と捉え、āliを五つの母音 (/a/, /i/, /u/, /e/, /o/)、kāliを二十九のka系列音（二十八の子音+_aアチュンで示される/a/音）とみなしている。シトゥはサキャ・パンディタに従って音声をyi geの本質とみなすが、他方では四つの母音記号とkaからaまでの三十の文字もyi geであるという見解を示している。

ムゲ・サムテンはチベット語の音声を一次的なyi ge (yi ge dngos gnas pa) とし、その音を表記する文字を二次的なyi ge (yi ge btags pa ba) として二者を区別することにより、従来のチベット語文法学におけるyi geの概念の混乱を解決しようとしている。yi geはチベット語文法体系の基盤をなす概念である。yi geに関する上記の議論が示唆するのは、チベット語文法体系が、文字の理論に大きく依拠しているという点である。そのことは後置字の用法を『三十頌』の最も重要な内容とするトンミの見解や、それに基づくシトゥの解釈によってもまた示されている。

第1章の1.2「チベット語における音声論について」で明らかにしたように、トンミは『三十頌』において、チベット語の調音位置や発音法について具体的な説明を与えていないため、トンミ以降のチベット文法学者達はサンスクリットの音声論に依拠して、チベット語の音声論を展開している。

シトゥはチャンドラゴーミンの『ヴァルナ・スートラ』に依拠してチベット語の音声論を構成しようとしているが、その理論で説明可能なのは、kaからaまでの三十文字の発音のみである。前置字・後置字・再後置字・頭字・足字を含む結合文字の発音法は、サンスクリットの音声論では説明不可能であるので、シトゥはジェツン・ソナム・ツェモの理論を用いて自身の音声論を完成させている。その際、シトゥが、ジェツン・ソナム・ツェモの依拠する7世紀のトンミの時代のチベット語の発音を模範とし、「表記と発音の一致」の原則を同時代に復活させようとした点は重要である。

第2章では、『三十頌』の敬礼文の中に二回現れる格助詞laの意味と、第五格の意味を表すnas助詞とlas助詞の用法に関するシトゥの考えとそこにおけるサンスクリット文法理論からの影響について考察した。

第2章の2.1「『三十頌』の敬礼文におけるla助詞の意味」で明らかにしたように、gang la₍₁₎yon tan mchog mnga' ba'i || dkon cog de la₍₂₎phyag 'tshal lo ||（「最高の美質を有する〔三〕宝に〔私は〕敬礼する」）という『三十頌』の敬礼文の中に二回現れる格助詞la（la sgra）の意味について、チベット文法学者達の間には複数の見解が存在する。

タティは、第一のla助詞をmnga'（「有する」）という行為が行われる場を表示する第七格として理解し、第二のla助詞をphyag 'tshal（「敬礼する」）という行為の目的（～のために）を意味する第四格として理解する。シトゥは二つの解釈を提示しており、第一解釈によればgang laのla₍₁₎は「行為が行われる場」を表す第七格、de laのla₍₂₎は「行為目的」を表す第二格として理解され、第二解釈によればgang laのla₍₁₎とde laのla₍₂₎は共に行為目的を表示する第二格として理解される。シトゥは第二解釈に立脚する時、gang laの助詞la₍₁₎とde laの助詞la₍₂₎の間には機能的な違いはないと指摘し、サンスクリット文法の知識を活用して自身の説を立証しようとしている。

第2章の2.2「シトゥによるチベット語第五格の説明」で明らかにしたように、nas助詞とlas助詞について、シトゥは先行の解釈を批判した上で、〈一次的発生源〉（'byung khungs dngos）、〈二次的発生源〉（'byung khungs dang 'dra ba）、〈区別〉（dgar ba）、〈包括的境界確定／包摂〉（sdud pa）の意味を見出し、特に後者二つについてはサンスクリット語例文との比較を行なって、〈区別〉と〈境界確定〉も第五格の中に含まれるという見解を示している。シトゥの見解として重要な「las助詞はsdud paの意味では使用されない」という点については、ツェテン・シャプドゥンなどの後代の学者達によって批判的に検討がなされ、シトゥ文法学におけるsdud paの解釈の改良が試みられている。

第3章では、一体性（de nyid）の概念とそれを表すla don助詞についてのシトゥの解釈と、トンミの『三十頌』に規定されないla don助詞naとlaの用法に関するタティやシトゥの議論を考察した。

第3章の3.1「一体性（de nyid）を意味するla don助詞」で明らかにしたように、シトゥはmchog gsum la skyabs su shes（「三宝を帰依処と知る」）という表現における助辞suを一体性の意味で理解し、skyabs（「帰依処」）とshes pa（「知る行為」）が一つの不可分な行為を表す表現であり、助

詞suがその一体性を表示する働きを持っていると主張する。ツェテン・シャブドゥンはそれに対して、もしシトゥの考えが正しいならば、mchog gsum la skyabs su shes（「三宝を帰依処と知る」）におけるlaも一体性を表す助詞になってしまうと反論する。さらに、シトゥの主張の根拠の一つは、おそらくサンスクリットの二重目的格（double accusative）の用法であると思われるが、ツェテン・シャブドゥンは mchog gsum la skyabs su shesはチベット語表現として不自然であり、mchog gsum skyabs su shesという表現こそが妥当であると論じ、実際的使用に即した正しいチベット語は何であるかという問題を追究している。

第3章の3.2「na助詞とla助詞の用法について」で明らかにしたように、トンミの『三十頌』に規定されていないla don助詞naとlaの意味的用法を補充するために、11世紀にチベットで活躍したインドの学者スムリティジュニャーナキールティは『言葉の門』において、新たにla don助詞naとlaの14個の項目を与えるが、これに対してタティやシトゥは異論を唱えている。彼ら二人の間には若干の相違点があるが、彼らの議論が共通に示しているのは、スムリティジュニャーナキールティの説には共起語の機能を考慮していないという欠陥があるということである。なぜなら、接続助詞naおよびlaは「質問」や「程度の限定」などの意味を表示するとスムリティジュニャーナキールティは述べるが、naとlaは共起語と共に用いられる時にのみ、それらの意味を表示するが、単独ではそれらの意味を表示しないためである。スムリティジュニャーナキールティの説に対するタティやシトゥの批判は、本質的にはこの問題に関わるものであるとあって良いであろう。

結論

本論より、シトゥ文法学の特色は、サンスクリット文法学に対する彼の深い理解に基づいて、スムリティジュニャーナキールティやタティなどの解釈を批判的に検討しながら、チベット語の音声論や助詞の用法を正しく解析しようとした点にあることが明らかとなった。彼のチベット語文法学はサンスクリット文法学の模倣に終わるものではなく、チベット語に固有の現象を説明することを目指すものである。それゆえ、それはトンミの『三十頌』の単なる註釈にとどまるものではないが、同時にトンミの伝統に深く根ざしたものでもあった。トンミが目指していたのは記述文法であったが、シトゥはトンミの時代のチベット語を模範とする規範文法への道を切り開いた。シトゥの関心は、彼自身が生きた時代のチベットで実際に使用されていた言語を記述することよりも、トンミの文法理論やサンスクリット文法学を根拠として、正しいチベット語はどうあるべきかという問題を追求することにあった。

付論

付論では、『シトゥ大註・三十頌』翻訳研究を提示した。